

## 北海道発地域産業と協働できる未来のある魅力的な支部をめざして

第 57 期北海道支部 支部長 森治嗣 (北海道大学)



今夏、北海道には一週間で3個の強烈な台風が上陸した。嘗て無いこととニュースは報じた。東北岩手県に観測史上始めて台風が上陸し、多くの死者と行方不明者が出たとニュースは報じた。山間の川沿いに堤防もない僅かな平地に立てられた介護施設で、襲ってきた濁流の中で社会的弱者が絶え果てた。嘗て無いこと、観測史上始めてと言う枕詞がつけば、安全は無視しされてもよいのか！予兆は必ずあるに違いないが、長い歴史の中で変革は突然来る。石器時代が終わった時、石は地球からなくなっていたであろうか。勿論そんなことはない。では

この先、機械は地上に存在し続けて行くとして、機械学会が世界から消え去ることはあるだろうか？世界を席卷した日本の精密機械は、ディスプレイとソフトが搭載された小さなチップが入った小箱に駆逐された。自動車もモーターと車輪と車体、それにバッテリーと小さなチップと制動装置を組み合わせるだけで、中国の田舎に立てた工場でも作れるようになった。そればかりか自動車で渋滞の中家族で出かけなくても自宅の部屋で、VRで自動車を運転し旅行に行った経験と記憶が得られるようになるかも知れない。最早ものがあってソフトがついてくる時代ではない。時代は機械が追いつけないほど更に変革し、機械を動かすためのソフトがいまや立場が逆転し、IOTやAIがその可能性を最大限に発揮できる物、機械メーカーを求めようとしている。

それでも未来に於いて、時代の期待に応える物、機械メカ作りは残る。しかし、時代の変革と進歩の要請に応えられないサロンの学会は石器時代の終焉と同じ運命にあるかも知れない。支部とて同じ運命にあってもおかしくはない。

会員数の減少は何れの学会でも問題となっている。魅力と未来が無ければいくら学生の会費を下げようが未来永劫会員数は回復しない。いま農学部は機械系より学生の人気も高く優秀な学生が集まると言われる。機械系より優秀と言うより、機械系の人気が最低ランクなのだから何処と比べてもそういう表現になりそうな気がするが、農業機械の自動化と無人化は農学部で人気が高いし就職も抜群に恵まれている。無人で田畑で働く農業機械や鉱山の重機等はAIなどのソフトに頼らざるを得ない。働く現場と普段から交流を深めていけば、当然農業機械の自動化と無人化の血の通った鮮度の高い生のニーズは肌で感じた筈である。北海道は本州の大都市圏に比べて現場が近い感が在る。其処にアカデミックのシーズが融合すれば良いし、またその逆にシーズがニーズを牽引するのも大いに結構である。北海道では大企業は限られるが、地元でさほど大きくなくとも可能性の秘めている多くの企業が在るはずである。それを発掘しその成長を当支部が支援するシステムを作りたいと思う。そのための入口として経験豊かなシニア会員の方に活躍して頂くルールづくりを前年度から行ってきた。トラブル相談からでも良いと思う。補助金だけに頼ってはいけない。補助金は手段であって、それを得ることが最終目的になってはならない。実証運転と称する補助金依存運転を座視し、補助金が切れてプロジェクトが雲霧消散するような未来の無いことを科学技術者集団の機械学会が放置してはならないと思う。機械学会北海道支部は地の利を活かし北海道発の地域産業と協働し、未来のある魅力的な北海道発地域産業を支援する機会を求めべきではないか。そのために変革を恐れず厭わず、シニア会員から学生会員まで垣根を取り除いて未来のある魅力的な支部をめざすべきと思う。